
償いのとき

きい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

償いのとき

【コード】

N8311I

【作者名】

きい

【あらすじ】

殺戮の館から2カ月後。彼女が訪れた思い出の町。

だが、そこではウイルス感染者で溢れていた。

過去への償いのためにもここでワクチンを造り出す事を誓う。

プロローグ（前書き）

前作より血と死体が増えます。お気をつけください。

プロローグ

＝メイリイ＝

彼の叫び声が聞こえる。

彼はたよりないけど、とても優しい人だった。いつだって、わたしと彼女を心配してくれていた。そして、穏やかに微笑んでくれる人だった。

なのに、いまでは叫んでいる。

……どうして？

どうして、叫んでいるの？

アーツ。

あのとき、見捨てて逃げ出したから？

それとも……。

なぜ、叫んでいるの？

彼の返事はない。

ただ、わたしの中で叫び続けている。

血の匂いが充満したあの日から。

あの時からずっと。

プロローグ（後書き）

ゲーム「デレジア」を参考にしております。

思い出の町

やっと戻ってきた。

ここはわたしが育った町。

町といつてもとても小さくて村に近い。

まだ、いてくれているかしら？

淡い期待を胸に洋館に向かった。

ところが、町はコンクリートでできた壁で覆われていた。

きつと、ウイルスに感染した人たちを逃がさないようにするためのものだ。

洋館もとどころ焦げ付いて、白い壁はほとんど黒ずんでいる。

この洋館は彼と出会った場所だった。

そして、彼らと一緒に暮らした場所でもあった。

一番、思い出深い場所だったのに……。

かすかな怒りを感じながら、建物の中に入る。

中に入ると壁は焼きただね、おびただしい血で溢れている。

ぞく……。

背すじが凍る。

あまりの血の量に思わずひるむ。

足を踏み入れたばかりだ。

まだ、あきらめたくはない。

ばき、ばき

歩くことにむき出しになった床の材質が音を立てる。

やはり、人の気配は感じられない。

やっぱり、だれもいないのかしら？

むしろ、誰かがいるとは思えないほどむごたらしい。

しかも、この洋館から逃げ出した日から3ヶ月も経っている。
待っているはずもない。

思い出の町（後書き）

時間軸としては

洋館から逃げ出す

殺戮の館

現在です。

窓からの景色

……分かっていたはずだった。
でも、すこしは期待してもいいでしょ？
と自分で自分を慰めてみる。

でも、せっかくここまで来たのだ。
もう少し、奥まで行ってみよう。

いくつもある部屋の1つに入ってみた。
左右5個づつ、シングルベットが並べられている。
ベットはどれも黒こげで、中身がむき出しになっているものさえあ
る。

窓を開けてみるとカラカラと渴いた音を立てた。
この部屋の窓が一番庭を見渡る。

わたしの記憶の中では庭は美しい赤い花で溢れていた。
マーテルが丹精込めて、育てていた花畑だ。

とてもきれいだっただ。
なのに……。

今では枯れているというより、焦げ付いて無残な姿をしている。
きつとやったのは国軍だ。
そう思うとまた怒りがこみあげる。

だけど、風だけは優しい。
開けた窓から時折風が髪をなでる。

まるで、慰めてくれているようだ。

ばらばら

右の方から紙の音が聞こえることに気が付いた。

窓の右横にこげた木の机と白い椅子が置いてある。

その机の上にボロボロになったノートらしきものが載っている。

開いてみるとポロリと1ページ分が崩れ落ちた。

焼かれたせいで脆くなっているようだ。

黒焦げの日記

これは日記？

【もしかしたら、マーテルの血液はワクチンに使えるかもしれない。そのワクチンをメイリイに使つと見る見るうちに良くなった。ぼくの考えは正しかったようだ】

これはアーツが書いた日記のようだ。

さらに、次のページにはマーテルの遺伝子を利用した、ワクチンの製造方法が書かれていた。

どうやら、わたしに打つてくれたワクチンはマーテルが元だったらしい。

だけど、彼らはどうなったのだろうか？

他のページに手がかりはないだろうか？

あまりにもページが脆いため、1ページ、1ページ慎重に開く。あるページで手が止まった。

【マーテルは国軍に立ち向かい、死んでしまった。メイリイもいなくなった。ぼくは】

そこでこのページは書かれていない。

マーテルは殺されていた。

「そんな」

思わず声がでてしまった。

すごくショックだった。

マーテル。

彼女の笑顔が浮かぶ。

わたしは彼女の笑顔に救われていた。
そのマーテルは死んでいた。

手が動かない。
体が動かない。

まるで、かなしばりにあっているようだ。

しばらく間、何もせずただその文字を見つめていた。

彼らはもう・・・いないだろう。

待っていて、欲しかった人たちはいない。
しかたないことだと無理やり納得した。

だけど、本当にここにはだれもいないの？
町の人たちはどうなったのだろうか？

教会

施設とよべるものはあまりない。

あるとすれば、この洋館と洋館から、かなり離れたところにある教会だけだ。

なので、教会の方に行ってみると中から美賛歌が聞こえてくる。

中に入ってみるとパイプオルガンが自動で演奏を奏でている。

だれかいるの？

あわてて奥まで進んでみる。

正面の天井にはピンク色の大きな蓮の花が描かれた、ステンドグラスが映える。

祭壇の前に少女が1人いた。

マーテル？

いや、そんなはずはない。

その姿が一瞬マーテルのように見えた。

「こんにちは」

後ろから少女に声を掛けてみる。

驚いたような顔で少女はこちらを向いた。

「あつ、こんにちは」

いきなり声を掛けたことで驚かせたようだ。

少女は目をぱちくりさせている。

「ごめんなさい。驚かせたかしら？」

出来るだけ、怖がらせないよう優しく話す。

「いえ、お祈りしてただけだから」

「何を祈っていたの？」

「これ以上犠牲者がでませんようにと」

犠牲者？

思考が止まった。

なんとなく、嫌な予感がした。

なるべく考えないようにしていたが、ありえる。

ウイルス兵器

目の前がゆがみそうになるが、確かめなければならぬ。

「犠牲者って言うのは何かしら？」

「ウイルス感染者のことです」

信じたくはない。考えたくはない。

「……………認めたくない。あれが利用されたなどと。」

「そのウイルス感染の原因は……もしかして、ウイルス兵器かしら？」

出来るだけ平静に訪ねたつもりだった。

だけど、心はひどく締め付けられている。

お願いだから。違うと言って。

祈るような気持ちで彼女の言葉を待った。

「ええ、そうですけど。どうして、分かったんですか？」

ああ。やっぱり……そうなんだ。

気が遠くなった。

もはや、彼女の言葉は耳に入っていない。

ショックがでかすぎる。

マーテルが死んだと分かったときよりもでかい。

恐れていたことが起こってしまった。

あれがウイルス兵器として使われたんだ。
わたしが造り出したあのウイルスが。

そう、それはこの町で医者として働いていたときの話だ。

造り出した者

ある日、高熱を出した子供に薬を与えた。ただ、薬の処方間違えてしまったのだ。

それが原因で子供は狂い、暴れ回って、自殺した。たくさんの人たちが感染し、狂いながら、死んでいった。それが、わたしが造り出したウイルスだ。

「さん、おねえさん、お姉さん？」
遠くの方で少女の声が聞こえた。
我に返ると心配そうな顔で少女はわたしを見つめている。
固まったまま動かないでいる、わたしを心配してくれている。

でも、心配しないで。
やらなければいけない事ができたのだ。

「ええ、大丈夫よ。それよりも犠牲者全員、わたしに見せてくれな
い？」
「えっ、でも感染するかもしれないし」
困惑気味に答える彼女を安心させるためにも、強めに言った。
「安心してわたしは医者よ」

知らなければいけない。
すべてを。

「まずは何が起こったのか教えてくれる？」

終戦をもたらしたもの

「わたしが住んでいた場所はある国の小さな村でした。わたしの国とこの国で戦っていたのですが、数十日前、村にウイルス兵器を落とされ負けました。」

（・・・つまり、この子の国はわたしが造り出したウイルスによって、終戦を迎えたのか）

「でも、それならどうしてここにいるの？」

不思議でならない。

この少女がこの国の領土にいることが。敵国であるはずなのに。

「連れてこられたんです。ウイルスに感染したかもしれないから。

わたしの国は既に、この国の植民地です」

なるほど、ウイルス感染した可能性のある人間をここで、始末するつもりなのだ。

わたしの脳裏に国軍がやってきたときの光景が蘇った。

あいつらは大勢でやってきて、わたしたちを殺してでもウイルスを奪おうとしていた。

最初からウイルスを兵器として、利用するのが目的だったのだろう。

そして、利用価値のない人間は容赦なく殺す。

いまもこうして、この人たちを見殺しにしている。

しかも、この町には感染した人間を逃がさないための壁もある。

まさにここはうってつけの場所だ。

国軍は人の命を何だと思っているんだ。

隠し扉

さっそく、わたしはプレアと名乗った少女に連れられ、患者を見に行くことにした。

そこは教会の裏だった。

茶色い焼却炉と死体が見える。焼却炉の横に置かれた死体は山のよ
うに積み重なっている。

そのすべての死体が気味の悪い紫色に変色している。

これは思っていた以上に犠牲者が出てしまっている。

「死体から感染するようなので、これから焼却するところです」

わたしが気味の悪い死体をにらみつけるように、見つめていたのを
気づいたようで、プレアは説明してくれる。

「それで患者はどこ？」

いまは死体のことより患者先だ。

「こちらです」

するとプレアは教会の裏にあったゴミ箱の蓋のようなものを開けた。

隠し扉？

隠し扉の下には階段があり、地下があるようだ。

この教会にこんなものがあつたとは知らなかった。

階段を下りると地下とは思えないほど、長い廊下が続いている。
ここからでも部屋がたくさん見える。

「これは」

地下があるのも知らなかったが、この地下はまるで施設のように立派だ。

あまりの立派さに驚いているとプレアが声を掛けてきた。

「地下3階まであるんですよ。さあ、行きましょう」

なぜだろう？

階段を下りる際に彼の叫び声が聞こえた気がした。

おそらくは気のせいだと自分に言い聞かせた。

隠し扉（後書き）

メイリイ 20歳前半の女医。

黒髪。黒いスーツ。白衣を着ている。

（殺戮の館からそのまま）

憤り

*地下1階*病室エリア

地下だけあって、とても薄暗い。

わたしが2カ月前までいた、病院の地下みたいだ。

こちらの照明の方が小さいようで、より薄暗く感じる。

「各階に部屋はいくつもあって、地下1階を病室に使ってます。こちらですメイリイ」

かちや

通された部屋には何十人もの人がベットで寝ている。

その人たちは健康な人たちと変わらない。

このウイルスの症状がでてくるのは末期になってからだ。

おそらくは念のために寝かされているのだろう。

「だれだ？ そいつ？ また軍の人間か？」

30代くらいの男がわたしを見るなり怯えた声を出した。

無理もない。

彼らにしてみればわたしは敵国の人間だ。

「心配要らないよ。メイリイはお医者さんだから」

「はじめまして。メイリイよ」

「医者？ふざけるな！どうせ何も出来やしない。

ここに来た医者たちは全員、何も出来ずに帰って行った！」

他の男が声を荒げ枕を投げつけてきた。

「なんの騒ぎだ？」

枕が顔に当たった痛みを押さえ、ドアの方を見た。
そこには銀髪のきれいな女性がいた。

憤り（後書き）

プレア 10〜12歳くらいの少女。赤茶色の髪。
白のTシャツ。ジーンズスカートを着ている。

エミール

その女性はとても美しく、だれも見惚れてしまいそうなほどきれいだった。

その美しさにわたしも少し、見惚れそうになった。

しかし、その顔は無表情で目に光もない。

「なにしにきたエミール!!」

さきほど枕を投げつけてきた男がさらに声を荒げている。

どうして、こんなにも突っ掛かいるだろう?

彼女を観察しているとあることに気づいた。

あの服はもしかして………。

「貴様の来る場所じゃねーんだよ。軍の犬め!」

やはり、エミールの着ている服はこの国の軍服のようだ。

「お母さま」

(お母さま?)

たしかにブレアはそう言った。

だけど、この国の子供ではないと言ってなかったか?

「だれだ?」

無表情のままでこちらを見ている。少し怖い。

どうやら、エミールはわたしのことを聞いているようだ。

「お母さま。こちらは医者メイリィよ」

「そうか。エミールだ。よろしく頼む」

それだけ言うとエミールはどこかに行ってしまった。

「お母さま……」

寂しそうにつぶやいたのをわたしは聞き逃さなかった。

エミール（後書き）

エミール　メイリイと同年くらい。
銀髪。迷彩服ぽい軍服を着ている。

子守唄

*地下2階*研究エリア・生活区

台所・風呂など生活に必要な部屋があるのはこのエリアだ。

わたしはこのエリアの1つで、再びワクチンの製造に取り掛かった。

造り方はわかっている。問題は材料だ。

以前、生み出した際の材料はマーテルの血液だった。

だけど、もうマーテルはこの世にはいないのだ。

どうすればいい？

なにかほかに方法はないのだろうか？

わたしは今まで得た知識で、いろいろ考えてみたもののいい案は浮かばない。

そのとき、子守唄が聞こえてきた。

エミールがまた下の階にいるようだ。

彼女はよく、不思議な子守唄を歌っている。

なぜエミールはプレアを放って歌っているのだろうか？

何を考えている？

プレアが寂しがっているのに。

少し前に見た、エミールは無表情な顔で歌を歌っていた。

彼女は何を思って歌っているのだろうか？

あの囚人たちしかいない地下3階で。

番外編 - せめて祈りを - (前書き)

番外編はメイリイではなく、違う人からの視点

番外編 - せめて祈りを -

あたしはいつものようにパイプオルガンを動かす。
ここに来てからのあたしの日課。

このオルガンはオルゴールのようなものなので、あたしでも簡単に扱える。

美賛歌が奏で始める。

あたしは曲に祈りを込める。

きつと、大丈夫。医者も来てくれた。
メイリイ

今度こそ大丈夫。彼女はきつと救ってくれるはず。

あとは……………。

お母さまの事。

無表情で何を考えているか、分からない母の顔が浮かぶ。

……いまは祈りましょうか。

あたしにはそれしか出来ないのだから。

いつか、この美賛歌と一緒に聞けるといい。

そのときが来るまで、あたしは祈り続けよう。

願わくは皆が笑える日が来るように。

番外編 - せめて祈りを - (後書き)

プレア視点でした。

真意

*地下3階*監獄エリア

囚人を閉じ込めている檻がたくさんある。

子守唄が壁に反響し、エリア内に響いている。

エミールはそこにいた。

囚人の檻を前に歌を歌っているのだ。

だけど、相変わらずその顔には表情がない。

囚人たちは檻の中でその歌に酔いしれ、うっとりしている。

「エミール」

「メイリイか？何か用か？」

わたしがエミールに問いただす資格はない。

だけど、このままではプレアがかわいそうだ。

「プレアのことが聞きたいの。どうして構ってあげないの？」

「実の娘ではないのでな。どう接していいのかわからないのだ」
表情はないが悲しそうに答えた。

プレアから聞いた話によると、戦孤児になったプレアを拾ったのが、
エミールだったそうだ。

エミールはプレアを気にしているものの、どう接していいかわから
ないでいるみたいだ。

それが、プレアを寂しがらせているのだが、それは伝わっていない
らしい。

もどかしさ

伝えるべきなのだろうか？

プレアはエミールが自分を避けていると思っている。実際には避けているわけではないのだ。

でも、わたしがそれをプレアに伝えていいものなのだろうか？

わたしは悩みながら、プレアの居る所へ向かった。

教会かしら？

部屋には居なかつたので、あと思い当たる場所は、最初に会った教会だけである。

中から美賛歌が聞こえてくる。

教会に入ると、プレアが少年と話しているのが見える。その光景はなんとほほえましい。

えっ？

彼の姿がよぎる。

「………アーツ？」

「メイリイ？」

わたしのつぶやきに気づいたのか、プレアがこちらを見る。不思議そうな顔をされた。

「なんでもないのよ。お友だち？」

「うん。まあ」

話題を変えるためにも、少年のことを訪ねてみるが、なんだか微妙

な返事された。

「違うの？」

「あ、そうじゃなくて。ただ、お母さまに」

言いにくそうだが、ようは少年をエミールに紹介したいようだ。

叫び声

紹介すればいいじゃない。という言葉を読み込んだ。
プレアはエミールに避けられていると思っているのだ。

やはり言うべきなのだろう。

エミールが避けているわけではないと。

「あのね。プレア。エミールはあなたを」

「いいんです。いいんです」言葉を遮られた。

なにがいいんだろう？

ちつとも、いいように見えないのだが。

「シャンティ行こう」

「あっ、まって、プレア」

＝メイリイ＝

アーツ？

彼の叫び声。

あの時に聞いた……。

ふと我に返るとそこには、すでに誰も居なかった。
オルガンも止まったようで、静かなものだった。

「……………アーツ」

どうして、彼のことが頭をよぎったんだろう？
もしかして、彼が怒っているんだろうか？

笑顔

赤い花が咲き乱れる庭に彼の姿が見える。

「アーツ？」

彼の方はわたしに気づいていないようで、違う場所を見ている。

マーテル。

アーツの視線の先にはマーテルが居る。

彼は優しい笑顔をマーテルに向けている。

いつだってそうだ。彼の一番は妹^{マーテル}なのだ。

「夢？」

どうやら、夢を見ていたらしい。

とても優しい夢だったはずなのに、胸が痛い。

本当は憎んでいた。

だから、願ってしまった。

手に入らないのなら、壊れてしまえばいいと。

わたしは嫉妬していた。

もしかしたら、そのせいであんな悲劇が、起こってしまったのかも
しれない。

アーツはわたしにも声を掛けてくれた。

ちゃんと聞こえていたはずなのに。

もう、思い出せない。

番外編 - 想い -

ピチャ、ピチャ・・・

気味の悪い音がする。

マーテルから流れ落ちる、血の音以外は何も聞こえてこない。穴の開いた天井から、月の光が青白く降り注いでいる。

ぼくは一人になってしまったのか？

さっきまでの怒号がウソのように静かだ。

マーテルの死体を抱え、めちやくちやにされた洋館に一人佇んでいた。

先に逃げ出してしまった、メイリイを恨む気持ちはない。

国軍はマシガンあいてを持っていたんだ。

ぼくだって、逃げ出したかった。

だけど、想いを伝えていれば良かった。

すべて失う前に。

ずっと前から気づいていた。メイリイの気持ちに。

せめて、無事に居て欲しい。

今、どこに居るか分からない彼女の身を案じながら、ぼくはマーテルの死体を抱えなおした。

マーテルの死体は花畑の下に埋めてあげよう。

きっと、マーテルも喜んでくれるはずだ。

番外編 - 想い - (後書き)

アーツ視点

罪悪感

分かってはいたが、薬の製造はうまくいかない。
気分転換もかねて教会に向かった。

美賛歌が聞こえる。

中に入るとプレアは始めて会ったときと同じく、祈りを捧げている
ようだ。

「また、お祈りしているの?」

「はい、わたしには祈ることしかできないから」

「そう」

真剣に祈りを捧げる、プレアを見ていると罪の意識ばかりが強くなる。

彼女には口が裂けても言えない。ウイルスを造り出したのが自分だ
という事は。

「それじゃまたね」

そんな彼女のためにも、早くワクチンを造らなくては。
そう誓いも新たに地下2階へ戻ることにした。

アーツの叫ぶ声が聞こえてくる。

彼がいるはずもないのに。

『いたぞ!あのガキだ!』

今度は本当に叫び声が聞こえてきた。

地下1階まで降りてきたところだが、慌てて戻った。

教会の前まで戻ると、そこにはガスマスクをつけた軍服の男が2人がいた。

裏切り者

なんなの？

状況についていけない。

何が起こっている？

男たちはプレアを囲っている。手にはナイフのようなものも見える。

「さあ、吐いてもらおうか。エミールの居場所を」

ガスマスクをつけているせいか、声がこもって聞こえる。

「知らないわ」

「知らないはずがないだろう。それとも死にたいか？」

プレアは2人の男たちに囲まれながらも気丈に振舞っている。

男たちはプレアに、ナイフをさらに突きつける。

「どうせ、ウイルスで殺すつもりなんでしょ？脅したってむだよ」

『ふざけるな！』

このままでは、本当にプレアは刺されてしまう。

「やめなさい！」

プレアを押しつけて男たちの前が出る。

「なんだ。お前は？」

「わたしは医者よ。あなたたちこそ何？」

「裏切り者を狩りにきた」

裏切り者？何の事だ？

エミールが裏切り者？

「なんのこと？」

「あいつは俺たちを裏切り、敵国の盾になったのさ」

つまり、自分たちを裏切り敵となったエミールを殺しにきたのか。

「わざわざ、ご苦勞なこと。ウイルスで死んだとは思わないの？」

「この目で裏切り者の死体を見たいのさ」

傲慢な奴らだ。

裏切り者（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

ユニークももつすぐ300です。

これからも、がんばります。

殺害

「わたしならここにいる」

いつのまにか、エミールがわたしたちの後ろに立っている。

「出て来るとはいい度胸だ。やるぞ」

『死ねー！エミール』

男がもう1人に声をかける。

声を掛けられた男が、叫びながらエミールに襲い掛かる。

あつ！

殺れる。

しかし、倒れたのは襲い掛かった男の方だった。

あたり一帯、血の匂いが充満した。

エミールはどこに持っていたのか、剣を手にしている。

「なっ」

「くそつたれが！」

これにはもう1人の男だけでなく、わたしまで驚いた。これに逆上したのか、その男もエミールに立ち向かう。

ドバア

右肩から血ふぶきを出して男は倒れこんだ。

エミールは返り血を浴び、血だらけになってしまった。

プレアも合わせ、騒ぎを聞きつけ集まってきた人たちも、時間が止まったかのごとく固まっている。

エミールは殺したのだ。

何のためらいもなく。

元仲間たちを。

倒れた男たちからは血があふれ出ている。おそらくは即死だ。

エミールは無表情な顔で、倒れた彼らを見つめているようだ。

プレアもショックだったのか、顔が真っ青になっていた。

罪の意識

メイリイ

メイリイ

『メイリイ』

彼の叫ぶ声とともに目が覚めた。

エミールが人を殺した日から、アーツの叫び声が耳から離れない。きつと、わたしに対する罰なのだろう。

プレアもその日から、部屋に閉じこもってしまった。

わたしは人を殺したと自覚したときから、罪の意識に苛まれているがエミールはどうなんだろうか？

あんなにも簡単に人を殺して心が痛まないのだろうか？

エミールの真意を知りたい気もするが、今はプレアの方が心配だ。

また様子を見に行こう。

わたしはプレアのいる部屋に向かった。

『メイリイ』

アーツは叫び続けている。

わたしを責め立てるように。
なんども。なんども。

彼は優しい人だったはずなのに。

番外編 - 伝えて -

手に殺した感触がまだ残っている。
血もべつとりと付いてしまった。

人を殺す事に何の躊躇もなかった。
それはそうだ。
いままで、何人も殺している。

だけど、なぜだろう。
今日に限って視線が痛い。
痛すぎて、どこを見ればいいか分からない。

ああ、そうか。あの子が見ているからか。

おかしいものだ。
いまさら、ためらうなんて。

私はあの時から変わったのかもしれない。

戦火の中で、瓦礫の山にうずくまっていた、プレアを見つけたときから。

だけど、それを表現する力はないのだ。

だれか、伝えてくれないか？
私は愛していると。

番外編 - 伝えて - (後書き)

エミール視点

気まづい空気

*地下2階*廊下

プレアが居るのはこの階の1つだ。わたしの研究室からも近い。あの部屋だ。プレアの居る部屋まで差し掛かった。

「メイリイ」

「エミール……」

声を掛けられたものの、なんとなく気まづい。

あんな事があつたからか。

「ちよつといいか。話がある」と言ってさっさと歩いていってしまう。

わたしは戸惑いながらも彼女についていく。

連れてこられた場所はプレアの部屋の近くにある部屋だった。

エミールが寝泊りに使っている部屋だろうか？

ベットしかない殺風景な部屋でエミールはベットに腰掛けた。

「ワクチンの事だ。そのうまくいっているのか？」実にとどどしい口調だ。

「えっ」

正直うまくはいいってはいない。

それを正直に言うべきだろうか？

「うまくいってないのだな。ワクチンの造り方は分かっているのか」

「それは分かっています」

「わたしに教えてくれ」

その目は真剣だ。

わたしはエミールにワクチンの製造方法を話した。

不器用な人

話を聞き終わるとエミールは何かを考えているようだ。

「わたしの血をワクチンとして使ってはくれまいか？」

「だけど、特定の遺伝子でないと」
少し混乱する。

「いったいどういふつもりなんだ？」

エミールの気持ちはよく分からない。

罪滅ぼしのつもりなのだろうか？

「わたしがその特別な遺伝子かもしれないだろうか？頼む。使ってくれ。それに」

つぶやくようにエミールは続けた。

「目の前で人を殺してしまったからな」

それはここにいる人たちのためというより、プレアのためということなのだろう。

彼女なりのプレアに対する愛情なのだ。

そうだ。

不器用なだけなんだ。

エミールを不器用な人としてみると、とてもおかしかった。

もはや、エミールが人殺しだということはどうでもよくなった。
ワクチンが完成すれば、わたしとしてもうれしい。

わたしは早速、彼女の血からワクチンの製造に取り掛かった。

うまくいってほしい。
プレアのためにも。

愛

「プレア」

「ちよつと出て来てくれない？」

わたしはプレアの部屋の前で、閉じこもったままの彼女に声を掛けた。

返事はないが言葉を続けてみる。

かちや

部屋からプレアが静かに顔を出した。

「さあ、いらつしゃい」

黙ったままにいるプレアを外に連れ出した。

広い原っぱのような所で足を止め、プレアをみる。
あいかわらず顔が暗い。きつと苦しんでいるんだ。

「わたしはこの町に住んでいたの。だけど逃げ出したわ。大切な人たちを見捨てて」

プレアにすこしでも、救われて欲しくて昔話を始めた。

「わたしは自分が可愛くて見捨ててしまったけど、あなたのお母さまは違うわ」

あなたは愛されているの。

だから、お願い。苦しまないで。

「これはあなたのお母さまなのよ」

新しいワクチンをプレアに見せてあげた。

それはエミールの遺伝子を使ったものだった。

ワクチンの製造がうまくいったのはもしかしたら、愛情のおかげかもしれない。

出来ることはやりつくした気がした。

これで少しは罪を償えたのだろうか？

だけど、アーツの叫び声は消えることはなかった。
強く。そして、責めるように。

メイリィと呼ぶ声は頭の中で響いていた。

エピソード

どうすればいい？

どうすれば、わたしを許してくれるの？

わたしにはもう何をしたらいいか、どこに行けばいいかも分からなかった。

だけど、彼からの返事はない。

ただ、彼は叫んでいる。

ねえ、叫んではかりないで………ちゃんと答えてよ。
……アーツ。

ああ、そうか。

わたしは会いたいんだ。

会いたくて。会いたくて。

想いがあふれ出す。

会いたい。

そのことに気が付いたら、よけいにアーツに会いたくなった。

なんだか体がふらふらする。

気が付けばあの場所にいた。

やっぱり、わたしにはこの場所しかないようだ。

彼と暮らしたこの洋館しか………。

「おかえり、メイリイ」

わたしは耳を疑った。

まさか。

まさか。

まさか。

そこに彼はいた。

我を忘れて彼の元へと駆けよった。

アーツの体を確かめるように、しっかりと抱きしめた。

「ただいま」

エピソード（後書き）

たくさんの方に読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8311i/>

償いのとき

2010年10月9日04時04分発行